

享保期における江戸の歌舞伎—二代目市川団十郎を中心に—

Bjoerk, Tove Johanna

### 【博士論文要約】

本論文では江戸享保期の中心的歌舞伎役者・二代目市川団十郎に焦点を当て、享保期における江戸歌舞伎の発展について考察する。

第八代将軍徳川吉宗の改革によって享保期の社会は政治的経済的に不安定となったが、この時期、江戸の歌舞伎界には二つの大きな事件が起きた。ひとつは正徳4（1714）年、江島生島事件によって山村座が廃絶すると、以後中村座、市村座、森田座の江戸三座が定着したこと、もうひとつは享保19（1734）年8月に森田座が借金のために営業を休止、翌年

これに代わり「<sup>ひかえやぐら</sup>控櫓」と呼ばれる臨時の営業許可によって河原崎座が旗揚げしたことである。この二つの事件によって、経済を集中する力を持った江戸歌舞伎劇場を中心とする経済構造が成立し、役者ら劇場関係者だけでなく、広く関連業者の生活を支える基盤となった。

江戸歌舞伎に関する研究は近世初期から元禄期、および宝暦期以降の二つに大きく別れているが、その間にある享保期については残された資料が少ないために、不明なところがいまだ多い。そんななか、享保期について記述されていながら、これまで十分に注目されてこなかった資料として、二代目市川団十郎の日記を挙げることができる。

二代目団十郎が活躍した宝永・正徳・享保・元文・寛保・延享・寛延・宝暦に渡るおよそ50年の間に歌舞伎の演技は成熟し、彼は現在も上演される数多くの場面を創作した。彼の日記には彼の日常生活の他、歌舞伎界の力関係や劇場経営への関与も見ることができる。原本は文化初期の火災によって焼失したが、享保期から寛延期の記録は五種類の写本に残されている。

ここでは守屋毅氏が紹介する歴史的演劇研究へのアプローチを用いて団十郎の日記を読み解く。氏は舞台芸能の歴史的研究を〈環境論〉と〈芸能論〉の二種類に分け、舞台興行を可能とする環境（劇場の経済や関係者の力関係など）について明らかにする一方、その舞台上で行なわれる劇の内容と意義を分析するし、いずれも演劇の社会的役割の解明に繋がると指摘する。

本論文では二代目団十郎の日記をもとに、第一部〈劇場の環境〉では享保期の劇場はどのように経営されたか、享保期の歌舞伎劇場はいかにして近現代まで運営を継続することができたか、歌舞伎興行は誰の役に立ったか、といった劇場をとりまく環境について第1～3章で考察し、第二部〈役者の演出〉では享保期にはどのような演出が行なわれたか、なぜ二代目団十郎の演出が当時の観客に好評をもって迎えられたのかについて第4～6章で考察

する。

第1章は「享保十九年の江戸歌舞伎——二代目市川団十郎と劇場経営——」とし、二代目団十郎の日記本「柿表紙」をもとにして、享保19年の市川座の興行を中心にして考察する。まず歌舞伎劇場の収入について把握するために、3期（正徳4年以前・正徳4年～享保9年・享保9年以降）に分け、劇場入場者数と入場料の変遷について明らかにする。

また看板役者の出演料が劇場の借金を膨らませる原因となったことや、歌舞伎興行には劇場に資金を提供する金主が不可欠だったが、これまでの紹介されることのなかった竹の子婆や江村庄介について述べ、彼らがもともと劇場の関係者だったことについて明らかにする。

次いで、市村座の座頭を勤めた二代目団十郎が享保19年の盆狂言「根源今川状」においてどのような役割を果たしたかを吟味する。二代目団十郎は演目を選択し、役者と作者の契約について座元八代目市村羽左衛門の相談役を勤め、出演料の支払いなど興行の管理にも関るなど、果たした役割は大きかった。

さらに、二代目団十郎の日記をもとに棧敷の入場料の変動について論じる。茶屋がかりの棧敷客が「根源今川状」を観劇した際支払われた入場料について明確にし、こうして享保期の江戸歌舞伎の経営構造の実態を示す。

第2章では「森田座の休座と河原崎座旗揚げ——二代目団十郎の関与——」とし、享保19年8月に借金が原因で森田座が休座となり、翌年から河原崎座が控櫓として営業許可を得た経緯について検討する。幕府の借金に対する法と裁判制度について把握し、まず享保12年、次いで19年に木挽町の地主たちが地代を請求するために森田座を訴えた際の裁きについて明らかにする。

森田座休座の以前から、新劇場開業の申請が行なわれていた。その経緯について考察し、やがて申請認可のルールが発見される。それがどのようなものなのかを明らかにする。こうした代理営業を「控櫓」というが、控櫓という仕組みは、江戸歌舞伎劇場の支出が収入を超えるという営業的欠点を解消するものではなかった。

第3章では「享保期の芝居茶屋と観客——二代目団十郎との関係——」とし、歌舞伎劇場の客層や周辺の芝居茶屋の変遷について、さらに二代目団十郎の芝居茶屋と茶屋客との関係について考察する。

茶屋と劇場は中世からともに発展したが、遅くとも延宝期には芝居茶屋は売色と劇場の棧敷への料理の提供という二つのサービスを行なうようになった。芝居茶屋は歌舞伎界の経済を動かす強力な業者であり、享保期になると出前や棧敷席の管理を行ないながら、無給の色子が売春によって稼ぐという構造に発展した。

そして、さまざまな劇場図を吟味し、芝居茶屋のサービスの変遷とともに劇場の客層も変化したことを示す。江戸前期のおもな棧敷客は優雅な貴族や富裕層であったが、享保期には観客が大衆化して一般客が多くを占めるようになった。

さらに、団十郎と葺屋町の芝居茶屋（大黒屋久左衛門）との親密な関係を吟味し、役者、

劇場関係者、そして芝居茶屋など関連業者を一つとし、彼が歌舞伎劇場を中心とする商業圏の発展にどのように尽力したかを明確にする。

こうして第一部では享保期における江戸の歌舞伎の興行がどのような経済的環境のもと上演されていたかを明らかにする。

第二部では、こうした環境の中で発展する二代目団十郎の演出の特徴について吟味する。

第4章は「二代目団十郎と江戸の開帳興行——不動明王の演出を中心に——」とし、江戸の町を賑わせた諸寺院の開帳興行に関連し、後に市川家の十八番として定着する不動明王の演技について考察する。

初代と二代目団十郎両人は出世のために不動尊に参り、初代団十郎は元禄中期に出現する不動明王ブームに合わせて不動尊を演出するなど、成田山新勝寺との関連を大切にした。また二代目団十郎は享保期中、さまざまな寺院の開帳興行の宣伝や劇場への集客に協力し、開帳興行を演出する際に行われた諸寺院との関連について吟味する。次いで享保20年に大病を得た二代目団十郎は病が快癒すると、しばしば不動明王を演じるようになった。以後不動明王の演技は開帳興行から独立し、やがて寛保2（1742）年上演の「雷神不動北山桜」において市川家の芸として定着するその経緯について考察する。

第5章は「二代目団十郎の宣伝と演出——もぐさ売りやせりふ正本を中心に——」とし、もぐさ売りのやつし芸と、それに関わる宣伝活動や出版物制作への関与について明らかにする。

まず宝永6（1709）年7月、初代団十郎の追善として山村座で上演された「傾城雲雀山」の物売りの演技の由来について吟味し、次いでもぐさ売りのせりふの内容を分析する。このせりふは実在のもぐさ売り商の住所まで公表するなど宣伝の要素が強く、以後これに便乗するもぐさ売り商人も増加した。

これ以降、二代目団十郎はもぐさ売り以外の商人を演じ、さまざまな手段で彼らの商売を宣伝するようになったが、こうした宣伝に関わる演出を享保期歌舞伎ひとつの特徴として位置付ける。

一方、本演目中特に好評を博したせりふを抜粋し、印刷した。その制作について、二代目団十郎がどのように関与したかについて考察する。また、それまであまり制作されなかったせりふ正本がこれ以後どれほど多く作られたかを明らかにする。その他番付などの制作についても言及する。

第6章は「享保期歌舞伎における喫煙の演出——二代目団十郎演じる助六を中心に——」とし、当時社会に広がった煙草の習慣と、助六の場面における煙草の演出について考察する。日用品を舞台演出に用いるのは歌舞伎の一つの特徴であるが、その演出の頻度がふえることと商品の流通が増加した。ここでは、煙草の伝来、喫煙の文化が社会にいかにか定着するか、そしてそれが歌舞伎の演出にどのように取り入れられ、どのように助六の場面が完成し、いかにして市川家の「十八番」として定義されるかを吟味する。

日用品が舞台上に頻繁に登場するようになると、それらが役柄を示す代名詞ともなり、

結果として、芝居によらず役柄そのものを再現できるようになり、時にはトレードマークとなる経緯を明らかにする。

こうして第二部では享保期の歌舞伎の演出は前の元禄期からいかに変更したかを明らかにした。本論文をとおして考察した江戸歌舞伎における環境と演出の変化がやがて江戸後期に行なわれるさらに大きい変化への萌芽と捉えることができるであろう。